

## 海底の「山」 震源を形成

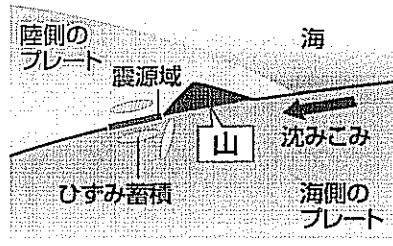
東大など分析

### 茨城県沖地震

約20年おきに起きていたマグニチュード(M)7級の茨城県沖地震を引き起こす震源域の形成に、海底下にある富士山級の大きな山がかかわっていることが東京大地震研究所などの分析でわかった。プレート(板状の岩盤)境界で起こる海溝型の巨大地震の発生メカニズムの解明につながる成果で、29日の米科学誌サイエンスに掲載される。

海溝型地震は、陸側のプレートとその下に沈み込む海側のプレートの境界にひずみが蓄積して起きる。これまで境界面にある山そのものがひずみを蓄積する

● 海底下に沈みこむ山と地震発生場所の関係



源域と考えられていた。同研究所の望月公廣助教(海城地震学)らは、この仮説を確かめるため、1982年7月と2008年5月の同じ震源域で起きた茨城県沖地震に着目、地震波の伝わり方などから海底下の構造を探った。

その結果、海側のプレートの上に直径約50キロ、高さ約3000メートルの山を見つけたが、地震の震源域とは一致せず、南東にずれていた。山すその直下に微小地震が多発していることも判明した。山が海側のプレートとともに沈み込む際、陸側のプレートにひっかかり、その山すそ直下や山周辺のプレートにひずみが蓄積し、震源域になるとみられた。